～女性がともに暮らすシェアハウス～

京町家シェアハウス「モモのうち」

（京都市上京区）

1 コモンスペースである、中庭を望む縁側つづきのリビング。大正硝子が使われた建具は、使われなくなった京町家のものがリユースされています。

人とのつながりを大切にした、心豊かな暮らしのカタチ

京町家を活用した女性専用のシェアハウス

かつては材木店が建ち並ぶ通りであった丸太町通から、ひとつ路地にはいった通りは、時間の流れもゆるやかな古都の雰囲気が漂う京町家が立ち並んでいます。京都市上京区にあるシェアハウス「モモのうち」は、そんな町家の一角にある今年6月にオープンした女性専用のシェアハウス。築100年あまりの京町家を改修したこの住まいは、京町家が持つ独特の風情を残した趣のあるものとなっています。

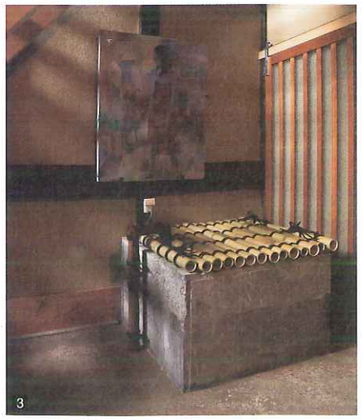
道を行き交う人々の、挨拶の声が聞こえる道路に面した玄関から中に入ると、水盤のある通り庭があり、そこを抜けると吹抜けとなった井戸とキッチンのある土間スペースが縦長に広がります。長い年月を経た梁や柱が、柔らかな光の中に映し出されて、黒く味わいの深い風合いを醸し出す、この吹抜けの壁面には、大きな油絵がいくつも飾られており、ギャラリースペースとして活用されています。「この絵画をはじめ、母が遺してくれた多くの作品のために、この住まいを手に入れた、といっても過言ではないのかもしれません」とは、自らを「管理人」とおっしゃるオーナーのKさま。長年暮らした東京を離れ、オープンと同時にこの地に移り住んで来られました。

昔ながらの風情を残す、古都の街への憧れ

外資系証券会社にお勤めだったKさまですが、多忙な日々の合間をぬって、これまでもよく京都を訪れていたといいます。「女性で初めて能舞台に立った、随筆家でもある白州正子さんに影響を受けて、能や謡に興味を持つようになりました。それから京都を訪れるようになったのですが、東京にはない雰囲気を持つこの街に次第に魅了されていきました。訪れるうちに京町家の存在を知るようになるのですが、築100年以上の木造建築物が、今でも現役で使われていることにとても感動しました」。

やがて1軒の京町家を購入し、京都を訪れた際に利用するセカンドハウスとして利用されていたKさま。けれど洋画家であったお母さまから譲り受けた作品を収納するには、その家では手狭であったため「モモのうち」となる、新たな京町家を購入することに。そんな折、「体調が心配になってきたこともあり、突然『ええい、辞めちゃえ』って思って。会社を退職して、私自身も京町家で暮らすことにしたのです。」と微笑みながらお話してくれました。

また、お母さまが亡くなる前に、ずっと介護をされていたとおっしゃるKさま。その際に、ご近所に住まわれる方々に協力していただいたことも多く、ご近所づきあいの大切さを実感されたといいます。だからこそ、昔ながらの長屋暮らしに憧れ、それが京町家に暮らすきっかけにもなったのだそう。東京では、都心のタワーマンションにお住まいだったKさま。利便性も高く、最新設備の整った居住空間は快適だったと語る一方で、「都会では、やはり人間関係は稀薄というか。ご近所づきあいがないだけでなく、どういった人が住んでいるのかもわかりません。ここでは、ご近所の方が気軽に声をかけてくれます。それも、ここにやってきた理由の一つかもしれません」と東京での暮らしを振り返っていました。



2 玄関内側の通り庭。キッチンのあるスペースと土間つづきになっています。　3 既存の井戸も活用。飲み水では利用できないため、庭の散水などに利用。
4 吹抜け部分を活用したギャラリースペース。お母さまが遺された作品を展示しています。

2

京町家を活用したシェアハウスへの試み

「モモのうち」は建物の奥にある中庭をL字に囲うように、1階は縁側のあるリビングからつづく3つの和室と、お風呂やトイレなどの水まわりのある離れがあり、2階にも3つの和室があるもの。大規模な改修は行わず、基礎部分をジャッキアップし、補強工事を実施。また京町家にありがちな押入階段は撤去し、土間に移設し、勾配もゆるやかなものに変更されました。水まわりなどの設備は新しくしたものの、建具については、使われなくなった京町家のものが再利用されています。リビングから庭を望む縁側の建具のガラスは、今は入手しづらくなった大正硝子が用いられていたため、波打って見えるガラスを通してみる庭の風景には、「とても味わいがあって気に入っています」とKさま。

ただ、一人で暮らすにはこの家は大きすぎる、と感じていたKさま。そんなとき、Kさまと同じように東京から京都に越してこられて、シェアハウスを経営しているお知り合いに勧められたのだとか。また「勧められたから、ということもありますが、京町家は、年々少なくなっているのが現状です。こうした建物をカフェやギャラリーに活用するのも、保全の一つのカタチだと思いますが、『町家』の名の通り、本来は人が暮らす場所なのではないかと。家は人が暮らすことで、ずっと長持ちするものだと思います。シェアハウスとして活用することで、京町家の可能性を試してみようと考えました」とKさまは、この家をシェアハウスとした経緯を力強く語ってくれました。

5 2階の中の間からつづくシェアルーム。引き戸のある間は通路となっていて、部屋に置かれた階段ダンスも、古い家で使われていたのを譲り受けたもの。
6 リビングには、中庭からの風が心地よく吹抜けていきます。 7 道路に面した2階の和室には、古い透かしガラスを利用した建具が用いられています。
8 階段の上がり口にあるシェアメイト用ポスト。